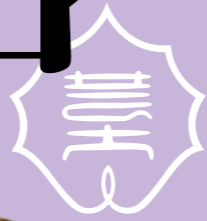


藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



29

SEPTEMBER 2014
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

深井隆

受賞教員インタビュー

【第八回】卒業生に聞く。

藤原道山

【第十二回】受賞学生インタビュー

杉山夏実 網守将平 坂下雄一郎

【第二十一回】教員は語る

中山英之 × 中木健二

【第十回】上野の寄り道散歩道「国立西洋美術館」

【第八回】研究室探訪

音楽学部音楽環境創造科

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No.29 SEPTEMBER 2014

編集発行 東京藝術大学 藝大通信編集部

深井 隆

受賞教員インタビュー 第10回

木彫の新たな可能性を切り開くとともに後進育成に取り組むなど幅広い活動が芸術文化の発展に大きく貢献したとして紫綬褒章を受章。



Photo by Hiroaki Horiguchi

学校で制作するということ

いまの僕にとって、学生の資質を見極めることが重要な仕事で、オンラインドックスな作品をつくるのが向いている学生と、どんどん新しいこと

を試みていく学生を見極めていくことが大事だと思っっているのです。彫刻家になりたいという学生から、本人のポテンシャルを引き出すため、「現代彫刻にはこういうのがある」という例を挙げて真似させるのは簡単

僕自身、若いときは新しい表現で作品をつくりたかった。当時流行っていた現代美術の方法、たとえばミマル・アートのようなことをやりたいと思ったこともあり、でも藝大に入ってから、いろいろ考えて、そういうことは真似ではな

なのです。僕が藝大に入ったころは、いまよりもっと保守的な教育のあり方でした。それに反発して勉強してきたのですが、「新しいことをどんどんやりなさい」と指導すればいいかという、決してそうとは言いつれない。過去の彫刻表現を踏まえたうえで、それをどうやって自分のなかで昇華していくのかが重要なのです。だから、僕も新しいことを知らなくてはいけないし、古いことの良さを教えていかななくてはならない。

第29号 目次

- 02 受賞教員インタビュー 第10回
深井 隆
- 04 Seidai gallery vol.9
ヨコミゾマコト Y-IH
- 06 教員は語る 第21回
中山英之×中木健二
- 09 受賞学生インタビュー 第12回
杉山夏実 網守将平 坂下雄一郎
- 12 TOPICS
映旬 美旬 音旬
- 20 卒業生に聞く。 第8回
藤原道山
- 22 研究室探訪 第8回
音楽学部音楽環境創造科
- 24 上野の寄り道 散歩道 第10回
国立西洋美術館
- 26 上野の杜の波瀾万丈 第18回
最終回に寄せて
吉田千鶴子 橋本久美子
- 28 展覧会&演奏会情報
木版ぞめぎー日本でなにが起こったかー
和楽の美 邦楽絵巻「義経記」静と義経を巡って
NEWS 2014.02～2014.07
- 30 編集後記



「逃れゆく思念—海—」2014年

いかと思いい、自分のなかのことを掘り下げて仕事をしようと思つたのです。そのころ木彫は古いジャンルという意識が強くて、新しいことをやるなら、金属や石を素材にする人が多かったですね。でも自分には木が一番思えたのです。

僕のアトリエは家と学校にありますが、学校で制作することが多いのは、学生と一緒にやることで、おかげさ言えば背中を見てほしいという気持ちがあります。作家と教育者の片方に偏ってしまうのではない。よい仕事をしなければ学生た

ちも僕の話聞いてくれないだろうし、自分の創作を反映させながら指導するのが大事だと思っています。

伝統の継承から生まれる木彫の発展

日本美術における木の存在というのは、すごく大きいものなのです。東京藝大美術学部の前身、東京美術学校に彫刻科ができたとき、木彫だけで始まりました。二代目校長で実質的には美術学校をつくった岡倉天心が、西洋の塑造がもてはやされていたなかで木彫を主導

したのは、個人的には先見の明があったと思います。

二〇〇二年(平成十三)に大学美術館の陳列館で、彫刻科の企画により、「垂直の時間 彫刻—過去・現在・未来」という展覧会を催しました。ちょうど二十一世紀に入ってから、大学美術館の収蔵品を中心に、日本の彫刻の歴史を垂直的に考えたと思ったのです。日本の彫刻家たちには、日本が「木の国」だということに改めて実感してほしい。歴史の伝承と継承を自分なりに訴えたいと思つて試みた企画でした。さまざまな表現媒体のなかでも木は非常に優れた素材だし、日本人には体質的にも心情的にも木が合っている。日本文化の基層には、木に対する精神的、宗教的思想が根ざしていますから。

新しい表現というのは、継承と破壊と発展から生まれるものなのです。ただ継承するだけではなく、既存のものを乗り越えていくには、否定して前進しなければいけない。近視眼的に見ると、新しいことは破壊に見えるかもしれないけれど、歴史を学び、否定すべきことは否定して、初めて新しい美術表現が出てくるのではないのでしょうか。

藝大通信
No.29
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信第29号

■編集発行

東京藝術大学藝大通信編集部

■編集委員

松下計(美術学部デザイン科教授・編集長)

八谷和彦(美術学部先端芸術表現科准教授)

吉田浩之(音楽学部音楽科教授)

鈴木純明(音楽学部作曲科准教授)

磯見俊裕(大学院映像研究科映画専攻教授)

大石泰(演奏藝術センター准教授)

アートディレクター

■松下計

■表紙デザイン

■表紙撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■撮影

■お問い合わせ先
東京藝術大学総務課
〒101-8704 東京都台東区上野公園12-1-8
電話 050-5552-10206
FAX 03-5685-7606
E-mail: toiwase@ml.geidai.ac.jp
URL: http://www.geidai.ac.jp/

深井隆(ふかいたかし)

教授—美術学部彫刻科
一九五二年群馬県生まれ。七六年東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。七八年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。八四年、東京藝術大学美術学部彫刻科講師。八五年、文部省在外研究員として英国(王立美術学校/RCA)に滞在。研究。九四年、東京藝術大学美術学部彫刻科助教授。二〇〇五年から同教授。

おもな受賞歴に一九八八年第十九回中原二郎賞優秀賞、八九年第十四回平瀬田中賞、九七年第十七回現代日本彫刻展(山口)(宇部市野彫刻美術館賞・埼玉県立美術館賞)、九九年第十七回長野市野彫刻賞、二〇〇二年第十一回タカシマヤ美術館賞、〇三年第六回倉吉緑の彫刻賞。





美術学部建築科―准教授

ヨコミゾマコト「Y I H」二〇一四年（撮影…小川重雄）

藝大から歩いて3分。

都市に残された貴重なオープンスペースともいえる寺院に向けて大きな開口部を持つ住宅。

ヨーロッパの音楽のあり方

みたいな活動をしています。

中山 学部から大学院の修士まで藝大におりました。その後、設計事務所に勤めて、自分の事務所を開いたのです。藝大では非常勤講師として、住宅からちよつとした街区の計画まで、さまざまな架空のプロジェクトを学生に出題し、彼らが模型や図面を使って設計案をまとめていくプロセスを指導する「設計製図」を数年受け持ちました。そして今年から、常勤の形で、上野に通うことになりました。

中木 僕は学部を二年半で休学し、そのまま退学したので、日本の最終学歴は藝大中退なのです(笑)。パリのコンセルヴァトワール(国立高等音楽院)に移ったのですが、留学する際の年齢制限があったので、藝大を卒業してからは間に合わなかったのです。コンセルヴァトワールには、一般課程と第三課程というプロフェッショナルな課程まで在籍し、その後ポルドーのオーケストラ(国立ポルドー・アキテーヌ管弦楽団)に首席奏者として三年半いまして、この春帰ってきたところです。

中山 僕は全く勉強をしない高校生だったので、あるとき急に建築に興味を持って、建築を勉強するのに最も優れた大学を調べてみました。そうしたらどこにも、東大だと書いてある。でも、自分の学力では到底無理です。そんなとき、藝大にも建築科があることを知って、もうこししかない。と。音楽系の人間が多い家系だったせいもありまして、東京藝大には何となく親しみを感じていたので、二歳上の姉も、藝大を卒業してからコンセルヴァトワールのリヨン校に入学し、いまはパリに住んでいます。チェンバロを弾いていまして、教会で演奏をしたり、バレエ公演の伴奏をしたり、町の音楽家

中木 お姉さまはチェンバロを弾かれるのですか。すばらしいですね。フランスは日本よりもずっと古楽の需要が高く、独立した分野として確立しています。向こうで驚いたのは、タクシーに乗ったとき運転手が、「私、ヴィヴァルディが好きで、この団体の録音をよく聴いています」と古楽演奏の専門団体を挙げるぐらい、シェアが大きいイメージがあります。

音楽を共有する空間のあり方が、日本とフランスでは大きく違ってきます。たとえば教会では、礼拝のときや、婚礼や葬礼といった家庭のなかのイベントの際に音楽が演奏されました。また食事の前に聴いたり、踊るための音楽も身近なものでした。一方が発信し、一方が受け取るというのではなく、双方が一体化していて、教会もサロンもオペラ座も生活の一部なのです。ですから日本のように、受動的に聞くだけの目的で演奏会に足を運ぶというのは、伝統的なものとは少し違った印象を受けます。

オペラ劇場の意義と目的

中山 大学を出てから伊東豊雄建築設計事務所で八年間働いていたのですが、そこで担当したプロジェクトが、まつもと市民芸術館という長野県松本市にあるホールの設計でした。設計に先立って、ヨーロッパの気になるホールを幾つか見て回ったのですが、日本のホールとの使われ方の違いに驚きました。おもしろかったのは、たとえばガルニエのオペラ座で、いちばん安いチケットで天井桟敷に行ったときに、馬蹄形劇場の多段バルコニーの上のほうの席からは、舞台が全然見えなかったことです。そこで知ったのは、劇場は必ずしも、あの四角いプロセニアムの枠の中を見るためだけの空間ではない、と



住宅「2004」©Toshiyuki Yano

第21回

教員は語る

美術学部建築科 准教授

中山 英之

中木 健二

音楽学部器楽科(弦楽) 准教授

藝大への期待・抱負・提言



© Mirco Magliocca

いうことでした。そもそも劇場は社交の場でもあって、「向かいのバルコニーにすてきな人はいないかな」なんてことを楽しむ空間だったのですね。だから、客席は必ずしも暗転しなかったといえます。ホワイエがあればどきらびやかなのも、インターミッションが休憩ではなく、勝負の時間だったと考えれば納得がいきます。

一方現代では、そんな天井桟敷席には小さな読書灯が備え付けてあって、音楽学生が安いチケット代で譜面を追えるようになっていたりする。同じ空間が時代を経て、社交の場から学びの場に切りかわっていることに、感動しました。

本場の馬蹄形劇場を見てきて、僕たちもあんなバルコニー席が作りたくない、舞台のすぐそばに聴衆が垂直に居並んでいる空間が作りたくない、と思いつながり設計したのですが、まづも市民芸術館は、小澤征爾さんが主催する「サイトウ・キネン・フェスティバル」のオペラ公演会場としても想定されていたので、すべての座席から、オーケストラピットの中にいる小澤さんの姿が見えるように設計する必要がありました。その葛藤が、僕にとつて生まれて初めての実施設計の貴重な経験でした。

中木 伝統的なヨーロッパの町には、どこでもひとつ劇場があって、そこはコンサートホールとは機能や目的が違います。オペラも含めて舞台を楽しむところで、日本のホールほど響かないですし、シンフォニーの醍醐味が味わえるわけでもない。ボルドーにはボルドー国立大劇場という、パリのガルニエのモデルになった劇場があり、そこが僕の職場だったのですが、そこは別に音楽ホールがあって二つは完全に分けられていました。

中山 劇場が郊外ではなく街の中にあるのは、とても大事なことですよね。でもたとえバスティーユのオペラ座は、風景のなかでその巨体を

を街が持て余しているような感じもします。ガルニエはもう少しコンパクトだけれども、今ではオペラの上演にはほとんど使われていない。フルサイズの上演というものが、いったい誰のために建てられているのかということ、僕にとつては大きな、建築の課題です。

まづも市民芸術館も専用劇場として一年に一回あるサイトウ・キネン・フェスティバルのためだけで運営していくわけにはいかないの、基本的には市民会館です。ただ、オペラのための劇場は、舞台だけで四〇メートル四方もあるような巨大な空間が必要で、市民会館としては持て余してしまう。そこで僕たちの設計では、舞台の上にもうひとつ小さな劇場がつけられるようにしました。普段は客席から見ることしかできない舞台の上にお客さんが入ってこれるように、三六〇席の折り畳み式の客席をセッティングして、ホワイエから直接舞台に出られるようにしたんです。実験劇場と呼んでいるのですけれども、ふだんは人の目に触れることのない裏側に市民が入ってきて、自分たちの劇場として使えるような工夫を形にしたものです。

日本に多くある、市民会館のような多目的劇場のあり方というのは、僕らが建築の勉強をしていたときには批判されました。けれども、すでに日本全国にある市民会館の延長にある日本らしいホールのあり方というのをもう少し肯定的に考える空間のあり方とか、その場所ならではの時間の過ごし方を、これから考えていけたらすごくいいだろうなと思うようになってきました。

美術学部と音楽学部の交流

中木 僕は、先生と呼ばれることには全然慣れないです。つまり、一演奏家として学生の音楽



に触れるわけであって、その演奏家の魅力がどんなところにあるのか、またどこに隠れているのかにしか興味がないといっても言い過ぎではありません。テクニクの上で、難しいものが弾けるようになった、いままでできなかった技術がこなせるようになったということに、学生たちはものすごく固執しているような気がする。でもそれが実際に、僕が聴衆のひとりとして演奏会を聞いたときに、「それで、何が？」というふうになる部分もあると思うのです。

ですから、学生との最初のミーティングでは、こんなふうにご自己紹介しました。「僕はみんながこれまでに習ってきたような先生とは違わし、僕のやり方を君たちに伝えるといったことはできません。そのかわりに君たちの演奏の一

番いいところを伸ばしたいと思う。それをどういうふうに形づくるのか、現場では何が必要とされているのかは、いまの僕自身が、演奏家として最も活動しなければいけない時期なので、分かってあげられると思います。だから、毎回のレッスンを本番だと思って曲を持ってきてください。そうでなければ、つくっている過程のものに手を加えることは僕にはできません。学生はたぶん困惑していることでしょう。でも、こういったスタンスの人間がいてもいいのではないのでしょうか。

音楽において演奏家はあくまで再現の担い手であり、すでに存在するものを、自分がすばらしいと思う形で提供するの仕事なのです。でも美術の人々は、今までになかったものをつくり出さなければいけない。クリエイティブな部分では、演奏家よりも作曲家に近い発想や、頭の使い方だと思うのです。その過程でどんな苦労があったのかを知る意味では、たとえば一枚の絵でも、デッサンや習作を見るのは、とてもいい勉強になると思う。そういうところから理解し得ないまでも何かを感じ取る。雰囲気をかき分け、においを感じ取れるようになると、その結果生まれてきたものに対して、責任を持って演奏しなければいけないということが、分かるようになると思うのです。

中山 そういう意味では、建築家というのちよつと不思議などころのある職業で、社会に出ると、僕たちは自分の手で物を生み出すことはしないのですね。建築の仕事というのは、基本的には、自分がつくりたいと思つてつくるのではなくて、つくってほしい人がどこかにいるわけです。さらに、実際に手を動かすのは、職人さんや大工さんなのです。ですから自分の手で自分の思いを直接形にするとか、自分の内にある経験を直接形にする

ということとはできないのです。ただ、そうするとすぐに「セオリー」のようなものが現れて、幅をきかれます。手っ取り早い定式のようなものが、どんどん風景を作つていってしまうようなことも起こってしまう。

だから、僕はそこにどのくらい実感を持つことができるのか、そのところがすごく大事だと思つています。たとえば、演奏家が楽屋口から入つていくナーバスな空気を実感できているか、聴衆が演奏会を聴き終えて、町の喧騒に戻つていく瞬間の空気を実感できているか。そういう実感を持つことが、セオリーを学ぶよりも、もつとずっと大切なことだと思つています。先ほど中木先生が、物がつくられていく過程における苦心や創造の苦しみを知ることが、最終的には演奏家としての自分をつくつていくけれどもそれは教えられる、とおっしゃったことをとても共感して聞いていました。

中木 四月の終わりに第六ホールの竣工記念演奏会があつたのですが、僕が藝大に戻つて最初に演奏させていただいたのが、その舞台でした。このホールをつくり上げて、演奏されるまでの過程というのは、建築家と音楽家のあいだでディスカッションがなされてでき上がったもので、稀に見る出来事だつたのではないかと思つたのです。そのプロセスを学生が見ることができたのは、とても意義深いことだつたでしょう。

幸いに僕もホルダーで、大きなシンフォニーホールができ上がつていく過程に立ち会うことができたのですが、アコースティックを調整する技師と話をして、こうしたらいいのではないか、ああしたらいいのではないかと、議論しながらつくつていきました。さらに言えば、ホールというのは一度完成しても、継続的に試行錯誤が重ねられていくものなのです。自分が演奏するその瞬間まで、そういっ

たことがおこなわれてきたことは、社会に出て演奏していく上で知つておく必要がある。ですから藝大在学中に、建築学科の学生や、ほかの美術学部との学生と触れ合つておくことは、とても有意義だと思います。

中山 久しぶりに藝大に通うようになって、音楽学部と美術学部が道路で隔てられ、二つの門が向き合つているというのは、空間的になんだかとてもおもしろいと、あらためて思いました。ここを行き来する学生や教員の視線、出来事や関係性みたいなものが、この道を交錯するような空間に、大学がこれから変わっていくことに期待を抱いています。

中山英之(なにかやま・ひでゆき)

美術学部建築科准教授

一九七二年福岡県生まれ。九八年東京藝術大学美術学部建築科卒業。二〇〇〇年同大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、伊東豊雄建築設計事務所(まつもと市芸術館)「多摩美術大学図書館」等を担当。〇七年「中山英之建築設計事務所」設立。主な作品は、〇六年住宅「2004(長野)」、〇九年オフィス「Yビル」(東京)、一二年「Y邸」(広島)など。主な受賞は、〇四年SD Review 2004鹿島賞、〇七年第三回吉岡賞、〇八年六花の森Tea House Competition最優秀賞など。主な著書に「中山英之/スケッチング」がある。二〇一四年より現職。

中木健二(なかがき・けんじ)

音楽学部器楽科(弦楽)准教授

一九八二年愛知県岡崎市生まれ。東京藝術大学音楽学部器楽科を経て二〇〇三年渡仏。ロームミュージックファンデーションの奨学生としてパリ国立高等音楽院チェロ科に入学。〇七年に同音楽院をフルミネーブル(一等賞)および審査員特別賞をもって卒業、引き続き同音楽院第三課程進学。同年スイス・ベルン高等音楽院ソリスト・ディプロマコースに入学。〇九年同音楽院を首席で卒業。一〇年フランス国立ホルダー・アカデミー管弦楽団首席奏者に就任。十三年、キングレコードよりアルバム「美しき夕暮れ」をリリース。使用楽器はNPO法人イローエンジェルより貸与されている一七〇〇年製ヨーゼフ・ゲアルネリ。二〇一四年より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013 大賞

杉山夏実

◆大学院美術研究科デザイン専攻博士課程2年

高校生の頃から、新宿や渋谷といった街の違いを感じながら散歩するのが好きでした。さらに遡ると、保育園のとき、動物の巣の絵を描くことがよくありました。ここが寝床で、ここが食料備蓄庫みたいに、動物があなぐらの中でどういうふうに暮らしているかを想像するのが楽しかったのです。それがたぶん環境や生活に興味をもったきっかけかもしれません。

藝大の大学院に入る前は、多摩美術大学の環境デザイン学科で建築を専攻していました。大学の卒業制作では、仮設住宅（木造仮設住居群）の提案をしました。大きな公共施設を設計するといったテーマ設定に、あまりリアリティを感じることができず、人間が生活する時間をデザインしたいと思ったのです。デザインとは、かたちなど通して人間の心にアクセスすることであり、モノが消えても人間に作用したことの

ほうが大事なのではないか。仮設住宅は消えてしまうけど時間が残る、その時間をデザインしたかったのです。

多摩美大を卒業後、デザイン事務所に勤めていたのですが、東京藝大大学院のデザイン専攻に進みたいと考えました。藝大のデザイン専攻は、「プロダクトが作りたいの?」「建築が作りたいの?」といったふうに、つくる媒体を規定されることがない。院試で話を聞きにきたときも、問題意識を否定しない場であることを実感できました。

「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013」で大賞をいただいた「About my "topos"」は大学院の修了制作でした。自分が育った東京郊外の日野市という丘陵地帯の住宅地をリサーチし、環境としての街のカラーの違いや、人間の内面に光をあてたかったのです。いっ

ぽうで、公共事業や商品の大量生産に対して、仮想の大衆を設定していることに違和感を覚えていました。「消費者ってだれ?」「市民ってだれ?」「社会」というけど、社会に実体があるのか?といった問いかけです。

現在の博士課程でも、修了制作のテーマは持続しています。その延長線上にありつつも、どのように発展させていくのかが大きな課題です。いま私がいる東京から地方、世界へと対象地を広げていくとき、結局は自分のフィルターを介さざるを得ないのではないか。博士研究として客観性を第一にすると、第三者が再現できるような「型」をつくることになりませんが、わかりやすく伝えるために色鉛筆や粘土を手になにかをつくりはじめるとそれはわたしの「かたち」になります。しかし、たんなる自己表現と捉えられてしまっただけではいけません。そんな思考錯誤をしているところです。



「About my "topos"」展示風景

すぎやま・なつみ

1985年東京都生まれ。多摩美術大学美術学部環境デザイン科卒業後、デザイン事務所勤務を経て、東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻に入学。2013年に「About my "topos"」で MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013 大賞を受賞。

第82回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)第1位

網守将平

◆大学院音楽研究科修士課程作曲専攻3年

僕が音楽の創作において最も興味を持っているのは、諸々のテクノロジーを用いて、人間や動物が音や音楽を聴くという体験そのものを変容させ、聴き手の意識を拡張させていくことです。そのためには建築家や映像作家、その他の美術家が持っている技術や感性がどうしても必要だし、彼らの活動に僕自身も常に影響されているので、自分が作曲する音楽は、少なからずそういった側面が反映した作風になっています。

藝大では学部の1年のとき、デザイン科の助手の方の映像に曲をつけたり、2年のときには大学院映像研究科の学生の依頼で長編映画の音楽を担当させて頂いたり、他学科との結びつきを深めることができました。

自分にとって、音楽体験と映像体験との関わりはもともとすごく大きなものでした。たとえば現代音楽を最初に意識した原体験は、スタンリー・キューブリック監

督の『2001年宇宙の旅』で、この映画で作曲家リゲティの存在を知り、感銘を受けたのを覚えています。その後は映像からだけでなく、多くの芸術から音に関わる影響を受けてきました。

コンピューターを用いた電子音楽/サウンドアートの分野でも活動しています。現代音楽の技術や作風は、こういった活動との関わり合いの中で磨いてきました。異なるジャンルの音楽を作る行為が僕の中では拮抗しており、それが作品の面白さや評価に繋がっているともしえるかもしれませんが、その代償としての葛藤は常に付き纏います。学部の2年生頃からこれらのテリトリーを行き来していますが、いくら活動領域を広げても作品が広く伝わりやすくなるわけではないという実状は今でも変わらないからです。なので、今後はもちろんあらゆる音楽を教養として学び続けながら、他人の評価に囚われず率直に自分の音楽性を発散できる活動にシフトして

いくつもりです。

日本音楽コンクールには、複雑なバックグラウンドを伴って発展した自分の現代音楽が、今日の現代音楽リスナーにどのように伝わるのか、上記のような葛藤にある種ヶジメをつけるような気持ちで出品しました。聴き手の意識を拡張させるというコンセプトをこれまで以上に重視した影響で、楽曲の構築度のリスクや演奏技術のリスクが大きくなった作品だったので、1位を頂けるとは全く予想しておらず、驚きました。嬉しさがある一方でもう少し批評的なフィードバックを頂けたらよかったなとも思っています。僕の場合、厳格に批評されることが次の作品への大きな原動力になるからです。いずれにせよ、多くの方に作品を聴いてもらえたことは大きなターニングポイントになったと思っています。これからも結果に流されず、自らの方向性をコントロールしていきたいと思っています。



サウンドアーティストの大和田俊とのラップトップデュオ「Cryogenic Rhythm Science」のライブパフォーマンス。当ユニットでは網守自らライブ中の映像も担当している。(撮影:三木俊達)



第82回日本音楽コンクール(2013年)作曲部門の演奏後
写真提供:毎日新聞



あみもり・しょうへい

1990年東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部作曲科を首席で卒業。現在同大学大学院音楽研究科修士課程在籍。2007年度第31回ピティナ・ピアノコンペティション特級において、新曲課題曲作品賞受賞。2011年東京藝術大学内において長谷川良夫賞受賞。2012年東京国際室内楽作曲コンクール入選。2013年第82回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)第1位受賞、併せて明治安田賞受賞。坂本龍一氏がナビゲーターを務めるj-wave[Radio Sakamoto]オーディションにおいて、電子音楽作品が入選。2014年電子音楽レベルPROGRESSIVE FORmよりリリースのコンピレーションアルバム「Forma. 4.14」に、AOKItakamasa等多数の電子音楽家と共に参加。www.shoheimimori.com



『神奈川芸術大学映像学科研究室』 © 東京藝術大学大学院映像研究科

さかした・ゆういちろう

1986年広島県生まれ。大阪芸術大学卒業後、東京藝術大学大学院映像研究科に入学。2011年に監督した『ピートルズ』でゆうばり国際ファンタスティック映画祭2012北海道知事賞を受賞。2013年、東京藝術大学大学院映像研究科7期終了制作として監督した『神奈川芸術大学映像学科研究室』がSKIPシティ国際Dシネマ映画祭2013長編部門(国際コンペティション)にノミネートされ、「審査員特別賞」を受賞。さらに、「SKIPシティ Dシネマプロジェクト」の第4弾作品に選出され、公開が実現した。

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭審査員特別賞

坂下雄一郎

◆大学院映像研究科映画専攻修了

今回受賞した『神奈川芸術大学映像学科研究室』は、大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、大学で助手をしていたときの経験をもとに撮りました。自分と同じような助手が主人公で、ある日、学生が機材を盗むという事件が起き、学科をあげてもみ消そうとする、といった粗筋です。東京藝大大学院の修了制作ですが、もともと映画祭に出品したい、できれば最終的に上映したい、と思って構想を練りました。

映画祭の傾向と対策を考えたとき、まず国内では、他の作品とジャンルが重なるものでは賞をとりにくいだろうと思いました。僕と同世代の監督が撮る映画には、登場人物が少なく、その人間関係や細かな心理描写を題材とする作品が多いのです。もともとそういうものをつくるのが苦手だということもあって、できるだけほかの作品と重ならない題材やジャンルを考えたときに、物

語を展開させていく動機が、事件や事故というものが少ないと気づいたのです。そのうえで、それほど知られていない業界の内幕もの、そして自分が経験した仕事ではどうだろうか。映画製作を教えている大学が舞台で、先生や学生ではなく、助手という微妙な立ち位置で働いている人間を主人公にしたら、僕が撮る必然性もあるだろうと考えました。

今回審査員特別賞をいただいた「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」は、埼玉県主導のもと、川口市を拠点として映像に対する活動を支援するSKIPシティ主催の映画祭です。長編部門には日本映画だけではなく、海外の作品を対象にしたコンペもあります。そこで『神奈川芸術大学映像学科研究室』が、日本映画を対象にした審査員特別賞を受賞するとともに、劇場公開を支援する「SKIPシティ Dシネマプロジェクト」

に選出されたのです。スカラシップのような形ではなく、作品を公開してくれるというのは、作家にとっては、とてもありがたいプロジェクトといえるでしょう。

藝大の大学院映像研究科は、設備や機材、作品に対しての予算があり、すごく恵まれていると思います。学校の施設をほぼ24時間使えるうえに、スタッフも学生ですから、人件費もあまりかからない。実際に今回の規模の作品を学外で撮ったとすれば、予算的にはとんでもないことになったでしょうね。

今後も劇場公開の長編映画監督としてやっていきたい。現実はなかなか難しいですが、監督の名前で見るような映画ではなく、題材やストーリーがおもしろそうだという理由で注目される作品をつくっていくことが理想です。



日仏韓合同ワークショップ
映画専攻

1

3 アニメーション専攻第五期生修了制作展
アニメーション専攻



4 映画編集公開講座
映画専攻



映画専攻第八期生修了作品展
映画専攻

2

TOPICS OF
FILM AND
NEW MEDIA
2014.02-07

映旬

1

日仏韓合同ワークショップ

◎映画専攻

La Femis (フランス国立映画学校)とKAFPA (韓国国立映画学校)の学生を招いて、一月二十三日～二月六日の日程で三校合同ワークショップを行った。短編映画の共同製作、国際共同製作映画に関するプレゼン、映画スタジオ見学などが行われた。

2

映画専攻第八期生修了作品展

◎映画専攻

八期生の修了作品展が三月一日～二日(馬車道校舎)、三月八日～十四日(渋谷ユーロスぺース)の日程で開催された。上映のみならず、俳優の役所広司氏や舞台演出家の岡田利規氏など、様々なゲストを招いてのトークイベントも開催した。

3

アニメーション専攻 第五期生修了制作展

◎アニメーション専攻

三月七日から九日まで、本学横浜校地馬車道校舎において、第五期生修了制作展「GEIDAI ANIMATION 05 GO」を開催した。修了作品と一年次作品の全二十九本の上映と、絵本作家のたむらしげる氏とアニメーション監督の片瀬須直氏を招いて、それぞれトークイベントの開催を行い、今年は過去最高の入場者数を記録した。また三月十五日から二十一日には、渋谷のユーロスぺースにてレイトショー上映も行った。

4

映画編集公開講座

◎映画専攻

三月十五日、馬車道校舎大視聴覚室において、映画の編集に関する公開講座を実施した。映画『夢売るふたり』(監督・西川美和)を上映し、同作の編集者である宮島竜治氏による講義を行った。その後、宮島氏、西川氏、筒井武文教授(映画専攻 編集領域)による鼎談を行った。

5

Open Theater vol.3 『アメリカン・スリープオーバー』

◎映画専攻

三月十五日、二十二日、二十三日の日程で、オ



8

OPEN STUDIO APRIL 2014

メディア映像専攻



5

Open Theater vol.3『アメリカン・スリープオーバー』

映画専攻



9

GEIDAI ANIMATION in 福井

アニメーション専攻



7

オムニバス作品『恋につきもの』封切

映画専攻



6

こどものためのシアター vol.1

アニメーション『木を植えた男』

アニメーション専攻



10

なんとかしナイト

メディア映像専攻

◎映画専攻
製作から配給、宣伝までを学生たちが行うオムニバス企画。八期生によるオムニバス作品『恋につきもの』監督・五十嵐耕平、一見正隆、梶井大地)は、四月十二日より新宿のシネマト新宿にて公開され、その後全国各地でもロードショーされた。

オムニバス作品『恋につきもの』封切

7

◎アニメーション専攻
三月十九日、次世代のこどもたちへ、映像を見る、感じる、読み解く方法を教えるための映像鑑賞教育に取り組む企画として、第一回目はフレデリック・バック監督の長編アニメーション作品『木を植えた男』をセレクトし、横浜市立元街小学校の五年生九十七名、引率教員四名を招待して、本学アニメーション専攻の岡本美津子教授が解説とともに上映を行った。

こどものためのシアター vol.1 アニメーション『木を植えた男』

6

プリンシアター第三回が開催された。国内未公開のインディペンデントのアメリカ映画『アメリカン・スリープオーバー』(監督・デヴィッド・ロバート・ミッチェル)の、日本初の字幕付き上映を中心に、関連する作品の併映、およびゲストを招いてのトークイベントを開催した。

◎メディア映像専攻
五月二日、横浜校地新港校舎を会場に、メディア映像専攻の修士一年による特別演習の成果発表として「映像『メディア』そして「見ること」そのものの探求を行う展示会を開催した。藤幡正樹教授による三週間の特別演習を通して考えた、今後のメディアの可能性、探求すべき問題などを、一夜限りの展示として発表した。

なんとかしナイト

10

◎アニメーション専攻
四月二十六日〜五月六日、東京藝術大学と福井県とのコラボレーション事業として、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の上映を行った。第一期生から最新作である第五期生までの全修士作品を、福井県立美術館の講堂にてリピート上映を行った。

GEIDAI ANIMATION in 福井

9

◎メディア映像専攻
四月十二日、十三日、横浜校地新港校舎を会場に、メディア映像専攻の修士二年による展示会を開催。映像やメディアというものを自明なものとして扱うのではなく、常にメディアの意味や特性を捉え直すという立場で作品制作に取り組み、写真、シングルチャンネル映像、インスタレーション等、様々な作品形態で発表した。

OPEN STUDIO APRIL 2014

8



オスロ芸術アカデミー × デザイン科
国際交流ワークショップ

1

TOPICS OF
FINE ARTS

2014.02-07

美旬



保存林(奥の細道)植栽実験

2

オスロ芸術アカデミー × デザイン科 国際交流ワークショップ

1

四月二十五日二十八日の二日間、ノルウェー国立オスロ芸術アカデミーデザイン科との学生交流ワークショップが、デザイン科にて実施された。

秋葉原をリサーチし、ノルウェー人向けの秋葉原観光宣伝ツールを作成する二日間にあたるワークショップ。

丸一日秋葉原を探索し、協働でグラフィック作品をつくることで、外国語でのコミュニケーション力の向上と、異文化の視点を採り入れた作品制作の姿勢を学んだ。

保存林(奥の細道)植栽実験

2

五月十二日から十四日、キャンパスグラウンドデザイン室とデザイン科環境・設計研究室にて、二月の豪雪で痛んだ保存林の再生を目的に



乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室 展
小さな風景からの学び

4



デザイン科 学部3年生
公開講演会「FUTURE VISION」

3



5

“The Asakusa Resident Centre”
東京藝術大学建築科／オーストラリア・クィーンズランド大学共同ワークショップ



3
デザイン科 学部3年生
公開講演会「FUTURE VISION」
五月二十九日、中央棟第一講義室にて公開講演会を開催した。平日にもかかわらず、多くの来場者に恵まれた。
十チームの三年生が、国連のウェブサイトに挙げられている「Global Issues／グローバルイシューズ（地球規模の諸問題）」の中からテーマの一つを選択し、十歳の主人公が登場するストーリーを作り、問題提起もしくは問題解決を含む、プロジェクト、プロダクト、メディアコンテンツ等なんらかのアウトプットを提案して、十五分間のプレゼンテーションを行う課題である。

3
デザイン科 学部3年生

公開講演会「FUTURE VISION」

五月二十九日、中央棟第一講義室にて公開講演会を開催した。平日にもかかわらず、多くの来場者に恵まれた。

4
乾久美子+東京藝術大学
乾久美子研究室 展
小さな風景からの学び
四月十八日から六月二十一日まで、TOTTOギャラリーにおいて、建築科乾久美子研究室の学生らによって行われた、都市リサーチの成果が展示された。

4

乾久美子+東京藝術大学

乾久美子研究室 展

小さな風景からの学び

四月十八日から六月二十一日まで、TOTTOギャラリーにおいて、建築科乾久美子研究室の学生らによって行われた、都市リサーチの成果が展示された。

これは約二百を超える市区町村で撮影した風景写真約一万八千枚を類型学的に分析し、「サーピス」というキーワードによって選んだ約二千枚を一七六ユニット（写真群）に層別した。
なお、この展示に合わせ、書籍『小さな風景からの学び』（TOTTO出版）も発行された。

5

“The Asakusa Resident Centre”

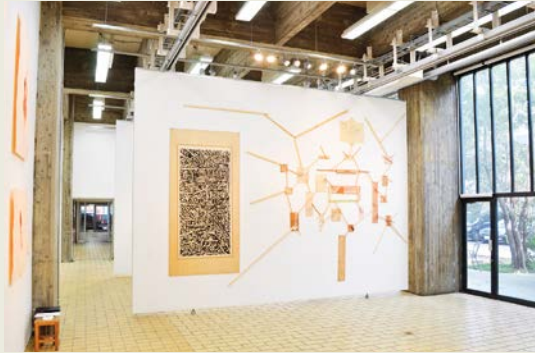
東京藝術大学建築科

オーストラリア・クィーンズランド大学

共同ワークショップ

四月十三日から十九日、美術学部総合工房棟多目的ホール他において、オーストラリアのクィーンズランド大学建築学部トラベルアブロードデザインスタジオと建築科トム・ヘネガン研究室において、共同ワークショップが開催された。
このプロジェクトは、「浅草住民センター」の設計を行うもので、地域の住民のためのものがあり、浅草を訪れる大多数の「訪問者」に圧倒されることなく、自分たちのローカルアイデンティティを再認識することのできる場所となる。地域住民が出会い、リラックスして話を行い、「地域住民のためのクラブ」のように使用されることを考える。

プログラムとしては、レストラン、バー、会議室、図書館、リラックスして街中のイベントを外を見るための場所など。また銭湯と十五から二十部屋程度を備える旅館（各部屋四畳）の設計を行い、訪問者に浅草が持つ独特な文化や雰囲気を楽しんでもらえる空間を提供する。



版画第二研究室展「ずれた」 6



安宅賞展 7

6

版画第二研究室展「ずれた」

六月十九日から六月二十七日まで、版画第二研究室展「ずれた」が絵画棟一階アトスペース1、2で開催された。今年で三回目となる本展だが、版画第二研究室教員四名と在籍する学生十二名が出品した。展示タイトルは、定着した版画表現、版画展示の形式を再度自分たちに問うというコンセプトを持ったタイトルだが、「ずれた」が続くにつれ、ずれがなくなるという矛盾を作家達を感じながらも、ユニークな作品展示となった。

7

安宅賞展

六月二日から六月六日まで、絵画棟一階 Yuga Gallery と立体工房において、平成二十六年年度安宅賞奨学基金受賞者による作品展「安宅賞展」が開催された。この作品展は、絵画科油画専攻三年に在籍する学生三名のグループ展示で、それぞれが個性的な作品を発表し、広く学内外にお披露目した展覧会となった。

8

久米賞展

五月十二日から十六日まで、平成二十五年年度久米桂一郎奨学基金受賞者四名による作品展「久米賞展」が、絵画棟一階アトスペース1において開催された。絵画科油画専攻二年に在籍する学生ならではの、若い力にあふれる野心



久米賞展 | 8



油画第三研究室展「Solar system」 | 9



日本画研究旅行「東北写生旅行」 | 10

的な作品が多く、展示は盛況を博した。

9

油画第三研究室展 「Solar system」

六月九日から十三日まで、油画第三(坂口寛敏)研究室の学生九名による展示「Solar system」が、絵画棟一階アートスペース1、2において開催された。展示タイトルである「Solar system」とは太陽の周りを公転する九つの惑星を研究室の学生に重ねている。メディアにとられない多様性に富んだ作品は、多くの鑑賞者を楽しませる展示となった。また十日には武蔵野美術大学からは枝開先生をお招きし、公開講評会が行われた。

10

日本画研究旅行「東北写生旅行」

毎年五月七日から十二日に行われる本研究旅行は、学部二年次の実技教育の一環として、日本画制作において重要な礎である写生を学ぶことを目的とするものである。青森県八甲田山西麓を発端に、十和田湖周辺までの道程を一週間の日程で巡る。その間合計約二十四キロの道程は徒歩にて移動し、雪深い山麓付近から緑豊かな溪流まで、東北のさまざまな自然と対峙し風景写生を行う。旅行後は研究成果としてスケッチを元に作品を制作。日本画制作における写生の重要性を認識するとともに、絵画表現のための視点や作画構成について実践的に学んだ。



TOPICS OF
MUSIC

2014.02-07

音旬

東京藝術大学音楽学部 4号館・第6ホール竣工記念式典・記念演奏会

1

上段：邦楽科「邦楽科 柿茸落公演」
中段左：声楽科「～愛しき歌～」
中段右：作曲科・楽理科・演奏藝術センター「作曲家 伊伊桑 室内楽曲の夕べ」より
ラウンドテーブル・トーク「伊伊桑が遺したもの」
下段左：指揮科「弦楽合奏とオーケストラの響き」
下段右：管打楽科「春の響宴～ Winds are singing,percussions are dancing!～」

1

東京藝術大学音楽学部 四号館・第六ホール 竣工記念式典・記念演奏会

四月二十二日、音楽学部四号館・第六ホール竣工記念式典が行われた。第六ホールは、昭和五十二年に四号館が新築されて以来、その中心的施設として数多く利用され、音楽学部の歴史を刻み続けてきた。しかし、時の経過とともに老朽化が進み、特に、ホール地階からの音漏れが気になるようになり、改修が悲願となっていた。

このたび、関係各位の多大なご支援のもと無事、改修工事が終了した。

新しい第六ホールは、木がふんだんに使われ、従来の音響の良さと遮音性を兼ね備えた素晴らしいホールに生まれ変わった。今後の活用が楽しみだ。

これを記念した演奏会が、四月二十六日から五月二日まで連続七日間にわたって行われ、一三六〇名の来場者に恵まれた。



音楽創造・研究センター開設

左：授業（実習） 中：センターの様子 右：スタッフ・ミーティング

2



④ ②
⑤ ③ ①

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート

3

① 5月15日 オルガン：清水奏花 ② 5月15日 ピアノ：西村翔太郎
③ 5月22日 ハープ：有馬律子 ④ 5月29日 サクソフォーン：上野耕平
⑤ 6月19日 作曲：逢坂裕
指揮：①、②、⑤高関健招聘教授、③山下一史非常勤講師、④湯浅卓雄教授
管弦楽：藝大フィルハーモニア

音楽創造・研究センター開設

2

文部科学省特別経費（プロジェクト分）を得て、今年四月に〈創造ラボ〉と〈研究ラボ〉から成る音楽創造・研究センターが開設した。日本独自のアピール力を備え、より広いオーディエンスを取り込むあらゆる芸術創造・社会発信のあり方を確立し、広く社会に呈示することは、芸術創造とその播種がますますグローバル化するなか、必須の課題である。そのため、〈創造ラボ〉では本学が現在持っている舞台上演の実践知に最新テクノロジーを援用して、あらゆる芸術創造を行い、〈研究ラボ〉ではそうした活動を支えるために戦略的研究を実施する。センターでは「社会発信型芸術創造イニシアティブ」を開発・展開することにより、芸術創造の新しい実践モデルを示すことをめざす。

3

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート

昭和四十七年に音楽学部第一ホールで始まったモーニング・コンサートは、すでに四十二年目を迎え、現在は奏楽堂で年間十三回、音楽学部所属の各科から選抜された優秀な学生がソリスト等として藝大フィルハーモニアと共演し、質の高い演奏が行われている。

平成二十五年四月からは有料化となり一時は来場者減少が心配されたが、年間を通じた来場者数は八六七四名にもなった。平成二十六年度についても、引き続き来場者を魅了する素晴らしい演奏が企画されている。

藤原道山

藝大に入ってやりたい目標がいくつもあった。
贅沢な環境に支えられていまの自分がある。



藝祭から受けた感動

祖母が箏曲家で、母もお琴をやっておりましたので、稽古場で育ったみたいなところがあります。襖の向こうで本を読んでいた、静かにしてなさいといった感じで過ごしていました。父親も音楽好きで、ジャズやクラシックとジャンルを問わず聞いていたので、自然と耳に入ってきたのも大きかったですね。歌を歌ったり、楽器を弾くことは自分も大好きで、なかでもリコーダーは、登下校中も吹くぐらいの熱の入れようでした。それを見た家族が、「男の子だし尺八を習えばいいんじゃないか」ということで尺八を始めることになったのです。

山本邦山先生に師事したのは中学二年生のときからです。邦山先生につく前に二人の先生に習っていましたが、最初の先生は手ほどのころに習っていて、その後たまたま邦山先生のお弟子さんが祖母のところへ合奏に来ていたので、その方に教えてもらうようになりました。熱心に教えていただきましたが、僕ののめり込み方を見て、もしよければ紹介しますと言ってくれたのが邦山先生につくきっかけでした。

中学一年生のときに、藝大に入った知り合いから、「藝祭に来てみる？」と誘われ、上野に行ってみると、野外でガムランや雅楽をやっていたり、ジャズバンドが演奏していたり、校舎の中ではオーケストラ演奏があれれば、お能があり、長唄があり、尺八、お箏が奏でられていて、さまざまな音楽がこの学校にはある。こんなふうに音に囲まれた環境の大学に進みたいとき思ったのです。

目標の達成に向けて

ぼくは藝大に入ったらやりたいことがいくつもありません。

ひとつはオーケストラと共演したいというもので、四年生のとき藝祭で、コンチェルトをやると決めていました。三年間はそのため準備しようと、作曲科がとるような授業に顔を出しているうちに洋楽系の学生と仲よくなりました。そうやっていろいろな人と出会うことで大きな影響を受けることができました。尺八のための作品を新しくつくってほしい、尺八という楽器をもっと知ってほしい――。

都立高校に通っていたとき、ブラズバンドでフルートを吹いていましたが、男は少なく、フルートは人数が多いので「指揮をやれ」と言われ、



『季(TOKI)-春-』日本コロムビア

指揮棒を振っていました。そういうこともあって、五線譜、特にスコアを読むのは苦になりませんでした。二年生になると藝祭で自主公演ができるので、邦山先生の作品でプログラムを組んだコンサートを開いたり、作曲科の学生に尺八の新曲をつくってもらって演奏したこともありま。新しい出会いによって自分の音楽もどんどん深まってくるし、音楽というのは人がつくっていくもので、ジャンルで区切られるものではない、「この人の音楽を聞きに行く」という意識が強くなってきました。それから自分のなかで、音楽の垣根がなくなりました。

大学での副科の授業も、やってみたことの一つでした。邦楽の副科では副主専攻の箏、三絃の他に、長唄の笛、鼓、雅楽の笙、能楽の観世流と狂言、能管をとっていました。狂言は野村万作先生に二年間、お習いしましたが、最初一〇人ぐらいでレッスンしていたのが、ひとり減り、ふたり減りして、最後は個人レッスンになり、能楽専攻生にうらやましがられました。(笑)万作先生はとても厳しかったですよ。西洋音楽の副科も積極的に受講して、二、三年生では小畑善昭先生にオーボエ、四年生では佐久間由美子先生にフルートを教わることができました。トッププレーヤーに教えることができる、藝大ならではの贅沢なところだと思います。

尺八のもつ可能性

ほかの楽器と異なる尺八の魅力といえば、音色がこれだけ多彩な楽器はないと僕は思っています。たとえば息の音も音楽にしてしまう。そこから純音に近いような音色まで、非常に幅広い音と音色を使いこなせるのです。西洋の人たちが尺八に影響されて曲を書くのも、そういうことが理由かもしれません。そんな意味で尺八は、まだまだ可能性に満ちた楽器ではないかと思っています。また、演奏する際、奏者の個性が強く反映されます。ちょっとした気の緩みまで出てしまいますから。どんな楽器でもそうかもしれませんが、楽器に頼り過ぎず、自分の意識をしっかりもつことが大切ではないかと思うのです。

来年はCDデビュー十五周年になるので、記念になるようなコンサートをいま企画しているところです。これまでに出会った人たちが、現在の自分にとっても大きな影響を与えてくださっているのです、そういう出会いを大事にしたコンサートにしたいと考えています。自分の出発点である藝大の方々にも参加していただきたいと思っています。



ふじわら・どうぞん

尺八演奏家・作曲家。1972年東京都生まれ。10歳より尺八を始め、人間国宝山本邦山に師事。91年東京藝術大学音楽学部邦楽科尺八専攻入学。93年都山流師範検定試験に主席登第。道山の名を受ける。95年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。同大学大学院音楽研究科入学、97年同修了。2001年アルバム「UTA」でCDデビュー。以来14枚のアルバムをリリース。現在、都山流尺八楽会大師範。都山流邦山会、日本三曲協会、江戸川邦楽邦舞の会会員。山本邦山尺八合奏団団員。「曠の会」同人。ホリプロ所属。東京藝術大学音楽学部邦楽科尺八専攻講師として後進の指導も行う。



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

音楽学部音楽環境創造科

Department of Musical
Creativity and the Environment

研究室探訪

第八回

Visiting the Laboratory

音楽環境創造科は二〇〇二(平成一四)年四月に、取手キャンパスに開設された。二〇〇六(平成一八)年には、東京都足立区の協力のもと旧千寿小学校を改装して誕生した千住キャンパスに移転。このキャンパスには、音楽環境創造科のほか、大学院音楽研究科応用音楽学研究室、アトリエゾンセンターが教育、研究活動を展開している。

音響制作スタジオ、録音調整室、スタジオオA、スタジオB、そして旧千寿小学校の体育館を改修した第7ホールなどの充実した設備を誇る千住キャンパスを活用して、音楽環境創造科では、音楽や音響に関する研究、映像、身体、言語、空間、メディアなど、音楽に隣接する表現分野の研究、コンピュータによる音響作品の創作や、映像、身体表現、メディアのための音楽制作、アートマネジメントや文化社会学、文化研究など、芸術と社会の関係に関する研究を通じて、芸術やそれを取り巻く環境を総合的に学ぶことができる。

教員は六名。就任順に西岡龍彦教授(作曲)、熊倉純子教授(文化環境)、亀川徹教授(音響学、録音技術)、市村作知雄准教授(身体表現・NPO論)、毛利嘉孝准教授(社会学、文化研究)、丸井淳史准教授(音響心理学、コンピュータ理工学)。今回は亀川教授が担当する「録音技法研究」を取材してきた。

音楽環境創造科開設からまもなくして教員になった亀川教授は、当時は振り返り、次のように語る。「大学が社会の中でどういう役割を果たすか、ということを問われて

いた時代。そのなかで、音楽と社会をつなぐ人材を育成するというのが学科設立の主旨でした。そういった社会へ発信するための研究分野のひとつとして録音技術が取り上げられたのです。

この日「録音技法研究」がおこなわれた録音調整室は、5.1サラウンドのモニタースピーカーシステムと3.2チャンネルのアナログミキシングコンソールを備える。「我々が聞いている音というのは、単なる物理的な現象と違い、耳を通して聴いていまるので、ひとりひとり違う聴き方をしているんです。たとえば同じ音の大きさでも低音は高音に比べて聴こえにくい。そういう人間の聴覚の特徴を理解していないと、録音するとき、なぜそういう音に聴こえるのかわからないのです」。五つのグループに分かれて、各グループごとに二本のマイククロホンを使い、工夫してセッティングをする。そして、どういった音が録れたかを

受講生全員で考える。さまざまなマイクホンの種類やその構造と機能、ステレオ録音によってなぜ音が立体的に聞こえるのか、二本のマイククロホンの間隔や指向性による聴こえ方の違いを学んでいくのである。

講義を受講する黒石紗弥子さん(学部二年)は、「高校は普通科で、学校とは関係なくミキシングをするのが好きだったので。文系でも学ぶことができるうえ、自分が知らない知識を持った仲間の話を聞くこともすごく楽しいですね」と語る。また染野拓さん(学部二年)は「高校時代、軽音部で演奏しながら、友だちのバンドの録音もしていたんです。この科には音楽マネジメントの授業もあり、これまで音響のエンジニアになりたいと思っていたのですが、ディレクションにまで志向が広がりました」とのこと。二人の話を聞いて、音楽環境創造科の横断性をうかがい知ることができ



録音調整室でおこなわれた亀川徹教授の「録音技法研究」

上野の 寄り道 散歩道

第10回

「国立西洋美術館」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



正面に立つのは、20世紀を代表する建築家ル・コルビュジエが設計した「本館」

© 国立西洋美術館

1 本館・前庭

日本を代表する美術館建築であり、上野のシンボルともいべき建物。国の登録記念物(名勝地関係)に登録された前庭・園地にはロダンの「カレの市民」を始めとする彫刻作品が展示される。



© 国立西洋美術館

JR上野駅の「公園口」の改札を出ると、彫刻が並ぶ庭の奥に、緑色の外壁で、前面が高床構造になった建物が見える。一九五九(昭和三四)年四月に、フランス政府から寄贈返還された松方コレクションを基礎に発足した、国立西洋美術館の本館である。この美術館は、広く西洋美術全般を対象とする唯一の国立美術館である。

「本館」は、戦後の日仏間の国交回復・関係改善の象徴として、フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエとともに「近代建築の三大巨匠」と並び称されるフランス人建築家ル・コルビュジエ(一八七五～一九六五)の設計により、一九五九(昭和三四)年三月に竣工。実施設計は、ル・コルビュジエの弟子である三人の日本人建築家、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正があたった。一九九八(平成十)年には建設省より「公共建築百選」に選定、二〇〇七(平成十九)年には国の重要文化財(建造物)に指定された。「サヴォア邸」「ロンシャンの礼拝堂」「マルセイユのユニテ・ダビタシオン」などで知られる巨匠が、日本に残した唯一の作品としても貴重である。



© 国立西洋美術館



© 国立西洋美術館

3 本館展示室

本館の一階から二階へは彫刻作品を眺めながら上れるように、階段ではなく、傾斜のゆるいスロープとなっている。二階は吹き抜けのホールを、回廊型の展示室が取り囲む。



© 国立西洋美術館

2 19世紀ホール

本館二階の中央部分は、屋上の明かり取り窓まで吹き抜けとなったホールで、ル・コルビュジエによって「19世紀ホール」と命名され、現在はロダンの彫刻の展示場となっている。

4 新館展示室

ル・コルビュジエの設計した本館と一体に機能するように増築。本館と一緒になつく三本の樺銀杏木などを抱き込むように配置され、それによって緑豊かな中庭が作り出されている。



© 国立西洋美術館



国立西洋美術館
東京都台東区上野公園7-7
開館時間 9:30~17:30、金曜日は20:00まで
※入館は閉館の30分前まで
休館日 月曜日(休日の場合は翌火曜日)、年末年始
<http://www.nmwa.go.jp/>

本館の背後に立つ地上二階、地下二階の「新館」は、緑袖タイルを貼った外観が特色。美術館開館二〇周年の一九七九(昭和五四)年に開館したこの建物は、本館の実施設計者のひとりである前川國男(一九〇五〜一九八六)の設計。国立西洋美術館の向かいに立つ「東京文化会館」や、東京藝術大学の南に位置する「京都美術館」も前川の代表作だ。

本館と新館では、松方コレクションの作品、創立以来毎年購入されているルネサンス以降二〇世紀初頭までの作品、寄贈・寄託作品を常設展として年間を通して展小。また、一九九七(平成九)年に竣工した企画展示館では、欧米の美術館などからの借用作品によって特別展を年一回、企画展を年二回ほど開催している。十月七日(火)からはフェルディナント・ホドラー展が行われる。

モダニズム建築の機能美と、展示作品の素晴らしさが融合した国立西洋美術館は、上野の杜の誇りといふべきものである。

上野の杜の 波瀾 万丈

第十八回 最終回に寄せて

東京美術学校から東京藝術大学美術学部へ、東京音楽学校から同音楽学部へ。
近代日本の芸術教育と芸術研究を支えた二つの道筋。

近代美術教育と美術学校

連載終了にあたって

吉田千鶴子

「上野の杜の波瀾万丈」シリーズが終了します。私は美術関連事項を担当し、思い付くままテーマを選んで計九篇を寄稿しました。最初に「美校騒動」と題して明治三十一年の岡倉天
心校長失脚について書いたのは、既定の本シリーズタイトル「波瀾万丈」に対応したためですが、これほど天心研究が進んでいるのに、いまだに騒動の原因が天心の専横さや私行にあったとされ、ゴシップのみが面白可笑しく語られているのを見て義憤を感じ、根本の原因は政府（文部省の方針にあったことを知って欲しかったためでもあります）。

第二回目の「美校の経営戦略・依頼製作事業」は、天心が美校の運営をできるだけ理想に

近づけるため、既定の学校経費のほか民間資本・公的資金を導入して依頼製作事業を開始し、皇居前広場の楠木正成銅像や上野公園の西郷隆盛銅像、博多の日蓮上人銅像、海外博覧会への政府出品物などの製作、古美術名品の模写・模刻等々を行い、それらを教員・生徒たちに担当させることによって研究・教育の充実を図ったこと。その事業が第二次大戦の時期まで続いて四六六件にも上ることを紹介しました。天心は文部省の意向を測ることもなく事業を開始し、実績を上げ、制度化してしまつたのでした。

第三回目の「紅一点」は美校が昭和二十一年の男女共学実施前は男子校で、例外的に少数の外国人女性を受け入れただけであり、きちんと卒業したのはマリー・イーストレーキただ一人だったこと、およびその原因などについて書きました。美校が東京音楽学校のように最初から男女共学だったら日本の近代美術はどうなつていたか。その点は何ともいえませんが、才能豊かで意欲に満ちた女性が制度のために最も環境

の整つた学校で学んで成長することができなかつたとすれば、実に惜しいことです。

第四回目の「中国人一斉帰国」では、美校には外国人留学生計二三九人（中国一〇三人、朝鮮八九人、台湾三〇人、その他一七人）が在学し、日本人に混じって勉強していましたが、一九三七年の日中戦争開始により諸分野の中国人留学生たちが一斉帰国した際に帰国を余儀なくされ、その後交流が途絶えてしまつたことを紹介しました。このことと、美校と中国美術界の間で培われてきた交流活動にも終止符が打たれてしまつたことは、戦争がもたらした大きな損失の一つです。近年、近隣諸国で近代美術の研究が活発化し、日本留学生たちの果たした役割の大きさが明らかになってきている状況に鑑みて、一層そのことを痛感させられます。

第五回目の「戦中の教官総辞職」は、一九四四年に文部省が断行した美校教官総入れ替え事件を採り上げ、決戦体制・非常時下に行われた「改革」が美校に何をもたらしたかを考えてみよう

としたものです。

第六、七回目の「日本美術の保護」では、本学において今日重要な部位を占める文化財保護の研究・教育分野の淵源について記し、第八回目の「作品展示施設の昔」では美校開校以後藝大美術館開館前までの展示施設の変遷を辿ってみました。第九回目の「サールナートの壁画」では、美校・藝大の歴史を語る際におよそ話題に上ることのない、野生司香雪という卒業生のインドにおける壁画制作の快挙を採り上げました。このような活躍の事例は数限りなくあり、美術史や美術教育、文学、ジャーナリズムその他種々の分野で意義深い活動をした人々などについても紹介してみたいところですが、いざ書くとなると下調べが結構大変なので、この辺で筆を擱きます。

（よしだ・ちづこ／総合芸術アーカイブセンター特別研究員・美術学部教育資料編纂室）

音楽取調掛（東京音楽学校） 音楽学部

来し方百三十五年を振り返って

橋本久美子

この連載で取り上げたのは、明治二十年代前半から終戦直前までの六テーマである。ここから見えてくる東京音楽学校とはどのような学校なのだろうか。

- 一、東京音楽学校存廃論争
- 二、歌劇《オルフォイス》上演
- 三、プリングスハイムの時代
- 四、上野児童音楽学園
- 五、東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊
(前篇・後篇)
- 六、東京音楽学校邦楽科への長い道のり
(前篇・後篇)

創立早々、学校は国家予算削減のあおりで存廃の危機に揺れた。

帝大生の間にワグナー熱が高まっていた明治三十六年、歌劇研究会は教員等の協力のもとグルック作曲《オルフォイス》を上演し、本科三年の三浦環等が注目を浴びた。再演計画もあったが、男女生徒が同じ舞台に立つことが風紀上問題視され、中止となった。

半世紀にわたりパッサ、モーツァルト、ベートーヴェンなどを中心に演奏してきた東京音楽学校管弦楽団を一気に欧米楽壇のレベルに引き上げようとしたのが、クラウス・プリングスハイムである。マーラー、ブルックナー、ストラヴィンスキーなどの近現代曲に挑戦した。しか

しユダヤ系の看板指揮者は昭和十二年に契約を打ち切られた。

昭和八年、時代に先がけて始めた音楽の早期教育機関である上野児童音楽学園は四倍の難関で、砂原美智子、園田高弘、中田喜直等を輩出。マーラーの《第三交響曲》の児童合唱ではドイツ語の暗譜で熱唱した。が、昭和十九年秋、戦局の悪化により閉鎖された。

昭和十九年秋、入営適齢の生徒十四名が陸軍戸山学校軍楽隊に入隊した。少しでも音楽の勉強を続けさせる方途であった。同校は在校生の

戦死者を出さなかった。

邦楽科は、唯一の国立音楽学校の「顔」として欠くべからざる存在である。家元制度や流派等の伝統を持つ邦楽が東京音楽学校の「科」となったのは昭和十一年であった。

本学音楽学部は、近代国家建設のための明治十二年の音楽取調掛創設という前例のない一歩に始まった。唱歌教材の作成や教師の養成とともに、数々の日本初演を行った。欧化政策の先陣を切る類例のない学校の歩みは、内外の荒波への前例なき挑戦の連続となった。国自体がそ

うであったから波瀾万丈の歴史をたどること
は、最初から運命づけられていたとも言える。
幾多の先人の尽力の賜である百三十五年は日
本の近現代史とともにあった。これを継承し、
二十一世紀の我が国と人類世界を視野に、前例
のない挑戦を続ける伝統にこそ、音楽学部の本
領が発揮されるのではなからうか。

取材や資料提供等で多くの方々にご協力いた
だきました。感謝申し上げます。

(はしもと・くみこ)総合芸術アーカイブ

センター特任助教・大学史史料室



草創期の東京美術学校



明治23年5月に新築された当時の東京音楽学校の校舎

Exhibition & Concert

展覧会 & 演奏会

Information

情報

TOPIC
1

第2回国際木版画会議 特別企画展 「木版ぞめきー日本でなにが起こったかー」

第2回国際木版画会議 特別企画展として「木版ぞめきー日本でなにが起こったかー」を開催します。

日本の伝統木版は、極東の地で和紙と共に成熟を重ね独自の形で発展を遂げました。和紙と水性絵具が触れることで出来上がる、柔らかくユニークな木版が確立したその周辺で、人々は心を揺らし魅了されました。木版は時代時代で人々を騒がせた、いや、木版を以て人々が「ぞめいた」のです。

現在世界的に木版画制作者が増加している状況に応答するように、アーティストの視点から材料や技法に焦点を置き、歴史的学術的陳列から解放することで、「なぜ、ユニークで「どうして面白いのか」を検証し、木版の持つ本質的な魅力に迫ります。

展示室を7つのテーマに分け、それぞれに作品や関連したモノを陳列展示することで木版を、より多面的に紹介し制作者・鑑賞者の双方にとって新しい発見の場となるように構成します。



左：恩地孝四郎「美人四季」より夏／東京藝術大学所蔵 右：古谷博子「風一韻 No.2」

特別プログラム：

アダチ版画研究所による伝統木版デモンストレーション

展示会場に再現された職人の仕事場で、彫師・摺師に実際の仕事を実演していただきます。

第1回 8月31日(日)13:00-15:00 第2回 9月12日(金)13:00-15:00

展覧会スケジュール (2014年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

本館

8月30日(土) ~ 9月14日(日)	第2回国際木版画会議 特別企画展「木版ぞめきー日本でなにが起こったかー」	入場料：無料
9月12日(金) ~ 10月26日(日)	台湾の近代美術ー留学生たちの青春群像 (1895-1945)	入場料：無料
9月23日(火・祝) ~ 10月19日(日)	平櫛田中コレクションーつくる・みる・あつめるー	入場料：無料
10月31日(金) ~ 11月3日(月・祝)	美術教育研究会20周年企画展示「つくったり 考えたりー美術教育からのメッセージ」	入場料：無料
11月13日(木) ~ 11月26日(水)	河北秀也 東京藝術大学退任記念 地下鉄10年を走りぬけて iichikoデザイン30年展	入場料：無料
12月18日(木) ~ 12月25日(木)	東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展	入場料：無料
1月26日(月) ~ 1月31日(土)	東京藝術大学卒業・修了作品展	入場料：無料

陳列館

9月11日(木) ~ 9月25日(木)	第2回国際木版画会議 国際公募展「国際木版画展2014」	入場料：無料
10月4日(土) ~ 10月26日(日)	第5回企業のデザイン展 花王株式会社「にほんのきれいのあたりまえ」	入場料：無料
11月4日(火) ~ 11月16日(日)	台湾・日本現代美術交流展 (仮称)	入場料：無料
11月23日(日・祝) ~ 12月3日(水)	公益財団法人芳泉文化財団 第二回 文化財保存学日本画研究発表展 「美しさの新機軸ー日本画 過去から未来へー」	入場料：無料
1月5日(月) ~ 1月15日(木)	東谷武美退任展	入場料：無料

正木記念館

9月12日(金) ~ 10月2日(木)	ー台湾絵画の巨匠ー陳澄波 油彩画作品修復展ー国立台湾師範大学文物保存維護研究發展中心・東京藝術大学文化財保存学保存修復油画研究室 共同研究発表ー	入場料：無料
11月20日(木) ~ 11月30日(日)	「邦楽器が受け継ぐ 技・形・音 こめられた丹精」展	入場料：無料

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。月曜休館。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車での来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先
● ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600
● 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

演奏会スケジュール (2014年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂

10月 4日(土)	藝大オペラ定期第60回 (モーツァルト: コシ・ファン・トゥッテ)	14:00開演	S席: 5,000円 バルコニー席: 4,000円	指定席
10月 5日(日)	藝大オペラ定期第60回 (モーツァルト: コシ・ファン・トゥッテ)	14:00開演	S席: 5,000円 バルコニー席: 4,000円	指定席
② 10月 8日(水)	和楽の美 邦楽絵巻 「義経記～静と義経を巡って」	18:30開演	S席: 5,000円 A席: 4,000円	指定席
10月 9日(木)	学生オーケストラプロムナードコンサート8 子ども楽しむオーケストラ	17:00開演	無料 (3歳から入場可)	自由席
10月12日(日)	上野の森オルガンシリーズ 異国のJ.S.バッハ (フランス編)	15:00開演	2,000円	自由席
10月13日(月・祝)	ピアノシリーズ「音楽の至宝」vol.2 ベートーヴェンのソナタ 第3回	15:00開演	3,000円 (セット券あり)	自由席
10月19日(日)	ピアノシリーズ「音楽の至宝」vol.2 ベートーヴェンのソナタ 第4回	15:00開演	3,000円 (セット券あり)	自由席
10月24日(金)	藝大フィルハーモニア定期 (藝大定期第365回)	19:00開演	3,000円	自由席
10月25日(土)	学長と語ろうXVI (ゲスト: 山田法胤薬師寺管主)	15:00開演	無料 (事前申込制)	当日指定
10月26日(日)	ウィーンの魔笛～ヘンリク・ヴィーゼ氏を迎えて	14:00開演	2,000円	自由席
11月 1日(土)	藝大プロジェクト2014 シェイクスピア～人とその時代Ⅲ 「時空を越えたシェイクスピア」	15:00開演	2,000円 (セレクト券あり)	自由席
11月 7日(金)	うたシリーズ	19:00開演	2,000円	自由席
11月 8日(土)	音楽学部附属音楽高等学校創立60周年記念「記念式典&演奏会」	14:00開演	無料 (事前申込制)	自由席
11月 9日(日)	音楽学部附属音楽高等学校創立60周年記念「藝高同窓会演奏会」	15:00開演	2,000円	自由席
11月15日(土)	学生オーケストラ定期演奏会第51回 (藝大定期第366回)	15:00開演	1,500円	自由席
11月22日(土)	藝大フィルハーモニア合唱定期 (藝大定期第367回)	15:00開演	3,000円	自由席
11月23日(日)	藝大定期吹奏楽第80回	14:00開演	一般 1,500円、高校生以下 500円	自由席
11月30日(日)	藝大プロジェクト2014 シェイクスピア～人とその時代Ⅳ 「東西が響き合うシェイクスピア」	15:00開演	2,000円 (セレクト券あり)	自由席
12月 3日(水)	藝大定期邦楽第81回	18:00開演	2,000円	自由席
12月 6日(土)	藝大アーツスペシャル～障がいとアーツ 第1日	12:30スタート	無料 (事前申込制)	自由席
12月 7日(日)	藝大アーツスペシャル～障がいとアーツ 第2日	12:30スタート	無料 (事前申込制)	自由席
1月31日(土)	藝大定期室内楽第41回 第1日	14:00開演	1,500円	自由席
2月 1日(日)	藝大定期室内楽第41回 第2日	14:00開演	1,500円	自由席
2月11日(水・祝)	東京藝大チェンバーオーケストラ定期第24回	15:00開演	1,500円	自由席
3月27日(金)	第9回奏楽堂企画学内公募演奏会	19:00開演	無料	自由席

モーニング・コンサート	9月10日(水)、11月13日(木)、11月27日(木)、2月19日(木)	11:00開演	1,000円 (入場整理番号付き)	自由席
-------------	---------------------------------------	---------	-------------------	-----

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。

※ 詳細につきましては、9月末発行予定の「平成26年度コンサートスケジュール(後期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/

※ 特に記載のあるものを除き、乳幼児等の就学前のお子様のお同伴・入場はできませんのでご了承ください。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケット取り扱い: モーニング・コンサートを除く

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280 <http://ticket.votre.co.jp/>
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 <http://t.pia.jp/>
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650 <http://t.bunka.jp/ticket/>
- イープラス(e+) <http://eplus.jp/>

※ チケット取り扱い: モーニング・コンサート

- 前売券: 藝大アートプラザ(店頭販売のみ) TEL: 050-5525-2102
※ 他店での取扱いはありません。※ 購入後の払い戻し・変更は一切できません。
- 当日券: 奏楽堂入口券売所(10:10販売開始予定)
※ 前売券の販売実績により、取扱いがない場合がありますので、ご承知願います。

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300



昨年の公演(2013年10月9日(水)和楽の美「弁財天縁起」)より

TOPIC

2

和楽の美 邦楽絵巻 「義経記～静と義経を巡って」

来たる10月8日(水)、奏楽堂にて毎年恒例の〈和楽の美〉公演「義経記～静と義経を巡って」が開催されます。この〈和楽の美〉公演の大きな特徴は、普段あまり共演することのない音楽学部邦楽科の各専攻がその垣根を取り払い、一致団結してひとつの舞台芸術を創り上げるところにあります。さらにその舞台美術を美術学部の教員が担当することで、音楽・美術両学部の粋を超えた藝大ならではのユニークな公演として人気を集めています。

今年は建築科の北川原温教授とその研究室のメンバーが舞台空間を設計し、映像も駆使した革新的な舞台空間が生み出されることが期待されています。そこで演じられるのは源義経と静御前を巡る物語。脚本と演出は昨年に引き続き、古典芸能に精通した織田紘二氏、音楽監督を山田流箏曲の萩岡松韻教授が務めます。静と義経を巡って繰り広げられる「邦楽絵巻」、音楽と美術が一体となったステージをどうぞお楽しみください。

運営

◆平成二十五年卒業式

三月二十五日、奏楽堂にて平成二十五年卒業式が実施された。

学長式辞では、「恕（じよ）」という文字を、「誠実な生き方や深い思いやりを持つ心が意味として込められていて、人として生きるための大切な道として使われている文字」と説明し、「自分自身にも周りの人たちにも深い感動を与える人物になれるよう、芸術家の道を歩んでいく上でこれを強く心に刻み込んでいってほしい」と新たな一歩を踏み出そうとしている若者たちを激励した。



◆平成二十六年入学式
四月四日、奏楽堂にて平成二十六年入学式が挙行された。

学長式辞では、式辞の最中に壇上で「信」という文字を揮毫（きごう）して掲げると、「人の言葉が心と一致し、信じることにより心が繋がり、大きな絆となる」という意味です。学生生活が、人として生きる喜びを知り、信じ合えるものをつくりあげる、日々であってほしい」と述べ、大学生活のスタートを切る学生たちにエールを送った。



◆「学長と語ろう こんさーと」
ゲストに演出家の蛭川幸雄氏を招き、六月十四日、第一五回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場の本学奏楽堂では、九〇〇名を超えるお

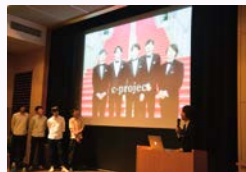


お客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

トークでは、蛭川幸雄さんが演出された舞台の映像がスクリーンに映し出され、蛭川演劇の「舞台の醍醐味」の話題で大いに盛り上がった。

第二部のコンサートでは、東京藝大シンフォニーオーケストラ（指揮：湯浅卓雄音楽学部教授）によるベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第三番》等の演奏が行われ、会場のお客様からのスタンディングオベーションなどもあり、大盛況の内に幕を閉じた。

次回の「学長と語ろう こんさーと」は、十月に、山田法胤さんをゲストにお迎えして開催予定。



受章・受賞

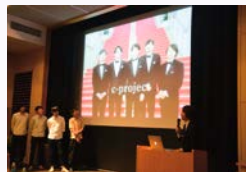
◆佐藤雅彦教授監修の短編映画

「HAPPY EN」(八芳園)が二〇一四年度カンヌ映画祭短編映画部門にノミネート

大学院映像研究科メディア映像専攻の佐藤雅彦教授が監修し、同研究科の修了生四名と共に制作した短編映画「八芳園」がカンヌ映画祭短編映画部門にノミネートされた。全世界から三四五〇本の応募の中から九本が選ばれた。修了生は、大原崇嘉、関友太郎、豊田真之、平瀬謙太郎の四名。

七月二十三日には、

今回のノミネートを記念して、上野校地の美術学部中央棟第一講義室にて、特別上映会が開催された。



◆新学生寮「藝心寮」お披露目会

五月十二日、四月にオープンした新学生寮「藝心寮」のお披露目会が藝心寮内交流サロンにおいて行われた。

当日は足立区から近藤やよい区長、馬場信男区議会議員、をはじめとした区議会関係者、地元自治会関係者など、文部科学省から森政之大臣官房文教施設企画部計画課整備計画室長、その他にも近隣大学関係者、企業関係者をお招きし、七〇名を超える出席があった。本学からは、宮田亮平学長をはじめ、役

員、副学長(教育担当)、研究担当、美術及び音楽学部長などが出席した。

藝心寮は、二十四時間使用可能なアトリイや音楽練習室が設置されていることや、藝大生のみならず足立区内にある大学の学生が入寮できるようにもなっていることも特徴になっている。

◆美術学部入試説明会を開催
七月二十七日、昨年に引き続き二回目となる、美術学部入試説明会が開催された。

今回は、日本画、油画、デザイン科の説明会は奏楽堂を使用し行われた。また、美術学部の全科が参加しての説明会となった。

◆青柳文化庁長官が大学美術館などを視察
五月二十九日、青柳文化庁長官が本学を訪れ、大学美術館「法隆寺・折りとかたち」展、陳列館「別品の折り・法隆寺金堂壁画」展をそれぞれ鑑賞した。

◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
藝大コレクション展「春の名品展」
会期 三月二十一日～四月十三日
入場者数 一万九〇四三名
観音の里の折りとくらし展
いびわ湖・長浜のホトケたち
会期 三月二十一日～四月十三日
入場者数 一万九二一三名
保存修復彫刻研究室研究報告発表展

◆《奏楽堂》
同声会新人演奏会 第一部
開催日 四月十二日
入場者数 五〇〇名
同声会新人演奏会 第二部
開催日 四月十二日
入場者数 五四四名
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会(藝大定期第三六二回)
開催日 四月十八日
入場者数 七六七名
藝大21 創造の杜2014「作曲家伊藤」
開催日 四月二十五日
入場者数 三二四名
「シェイクスピアと人との時代」
第一回シェイクスピアとエリザベス朝の時代
開催日 五月十八日
入場者数 五一一名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第一回 ウィーン時代初期
開催日 五月二十五日
入場者数 六六七名
第五〇回藝大生オーケストラ
(藝大定期第三六三回)
開催日 五月二十九日
入場者数 五五〇名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第二回 ウィーン時代中期
開催日 六月一日
入場者数 七二九名

客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

トークでは、蛭川幸雄さんが演出された舞台の映像がスクリーンに映し出され、蛭川演劇の「舞台の醍醐味」の話題で大いに盛り上がった。

第二部のコンサートでは、東京藝大シンフォニーオーケストラ（指揮：湯浅卓雄音楽学部教授）によるベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第三番》等の演奏が行われ、会場のお客様からのスタンディングオベーションなどもあり、大盛況の内に幕を閉じた。

次回の「学長と語ろう こんさーと」は、十月に、山田法胤さんをゲストにお迎えして開催予定。



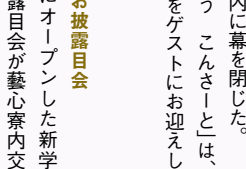
◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
藝大コレクション展「春の名品展」
会期 三月二十一日～四月十三日
入場者数 一万九〇四三名
観音の里の折りとくらし展
いびわ湖・長浜のホトケたち
会期 三月二十一日～四月十三日
入場者数 一万九二一三名
保存修復彫刻研究室研究報告発表展

◆《奏楽堂》
同声会新人演奏会 第一部
開催日 四月十二日
入場者数 五〇〇名
同声会新人演奏会 第二部
開催日 四月十二日
入場者数 五四四名
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会(藝大定期第三六二回)
開催日 四月十八日
入場者数 七六七名
藝大21 創造の杜2014「作曲家伊藤」
開催日 四月二十五日
入場者数 三二四名
「シェイクスピアと人との時代」
第一回シェイクスピアとエリザベス朝の時代
開催日 五月十八日
入場者数 五一一名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第一回 ウィーン時代初期
開催日 五月二十五日
入場者数 六六七名
第五〇回藝大生オーケストラ
(藝大定期第三六三回)
開催日 五月二十九日
入場者数 五五〇名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第二回 ウィーン時代中期
開催日 六月一日
入場者数 七二九名

◆《奏楽堂》
同声会新人演奏会 第一部
開催日 四月十二日
入場者数 五〇〇名
同声会新人演奏会 第二部
開催日 四月十二日
入場者数 五四四名
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会(藝大定期第三六二回)
開催日 四月十八日
入場者数 七六七名
藝大21 創造の杜2014「作曲家伊藤」
開催日 四月二十五日
入場者数 三二四名
「シェイクスピアと人との時代」
第一回シェイクスピアとエリザベス朝の時代
開催日 五月十八日
入場者数 五一一名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第一回 ウィーン時代初期
開催日 五月二十五日
入場者数 六六七名
第五〇回藝大生オーケストラ
(藝大定期第三六三回)
開催日 五月二十九日
入場者数 五五〇名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第二回 ウィーン時代中期
開催日 六月一日
入場者数 七二九名

◆《奏楽堂》
同声会新人演奏会 第一部
開催日 四月十二日
入場者数 五〇〇名
同声会新人演奏会 第二部
開催日 四月十二日
入場者数 五四四名
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会(藝大定期第三六二回)
開催日 四月十八日
入場者数 七六七名
藝大21 創造の杜2014「作曲家伊藤」
開催日 四月二十五日
入場者数 三二四名
「シェイクスピアと人との時代」
第一回シェイクスピアとエリザベス朝の時代
開催日 五月十八日
入場者数 五一一名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第一回 ウィーン時代初期
開催日 五月二十五日
入場者数 六六七名
第五〇回藝大生オーケストラ
(藝大定期第三六三回)
開催日 五月二十九日
入場者数 五五〇名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第二回 ウィーン時代中期
開催日 六月一日
入場者数 七二九名

◆《奏楽堂》
同声会新人演奏会 第一部
開催日 四月十二日
入場者数 五〇〇名
同声会新人演奏会 第二部
開催日 四月十二日
入場者数 五四四名
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会(藝大定期第三六二回)
開催日 四月十八日
入場者数 七六七名
藝大21 創造の杜2014「作曲家伊藤」
開催日 四月二十五日
入場者数 三二四名
「シェイクスピアと人との時代」
第一回シェイクスピアとエリザベス朝の時代
開催日 五月十八日
入場者数 五一一名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第一回 ウィーン時代初期
開催日 五月二十五日
入場者数 六六七名
第五〇回藝大生オーケストラ
(藝大定期第三六三回)
開催日 五月二十九日
入場者数 五五〇名
ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.2
ベートーヴェンのソナタ
第二回 ウィーン時代中期
開催日 六月一日
入場者数 七二九名



第29号刊行にあたって

「藝大の価値は人にあり」と言う観点で今号「藝大通信」も彩られている。小さな大学なのに意外に他の科や研究室は何をしているのかや、卒業生にはどんな方がいらっしや、どのような活動をされているのかわからないところがある。こうして藝大通信という場を通じて文化に関わる様々な領域の方達が交差するのはとても意義のある事であり、本来ならば大学自体がそうあるべきである。藝大通信(情報)から大学へ、メソッドが逆流する日が来ているのではないだろうか。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、
東京藝術大学公式 Web サイト
(<http://www.geidai.ac.jp/>)を
ご覧ください。

● 展覧会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

● 演奏会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

● 演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットびあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話は
ご利用いただくことができません。)
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
イープラス (e+)
<http://eplus.jp/>

● 藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102

出版会活動

「シェイクスピアと人とその時代」
第二回 目で見るシェイクスピア、
音で読む「ハムレット」

開催日 六月七日

入場者数 四一四名

藝大フィルハーモニアオーケストラ定期
(藝大定期第三六四回)

開催日 六月十三日

入場者数 三九四名

東京藝大チエンバオーケストラ

開催日 六月二十一日

入場者数 六五〇名

藝大21 藝大とあそぼう2014

開催日 七月五日

入場者数 五九四名

特別賛助フレンズ 個人 一三名
法人団体 三社

◆ 藝大フレンズ

加入者数(平成二十六年七月三十一日現在)
賛助フレンズ 個人 三九九名

個人 三九九名

特別賛助フレンズ 個人 一三名
法人団体 三社

◆ DVD「アニメーション専攻
第五期生修了作品集2014」を
三月八日より発売

◆ DVD「映画専攻 第七期生修了作品集
2013」を三月十日より発売

◆ 「絵画制作入門」を三月三十一日より発売
本書は、これまで三四年間、東京藝術大
学美術学部絵画科油画専攻一年次学生を対
象に「絵画技法史・材料論」として、講義・
実習してきた内容をもとに、絵画制作を本
格的に始めようと思う方(美術系高校、美
大受験生、美術大学学生、絵画教室の受講
生)のために、基本となる絵画に対する知
識と、実際に制作を進める手立てを、図版
を多数取り入れて、まとめられている。と
にかく、実際「眼で見て手で描き」ながら
読んでいただきたい。

◆ CD「東京藝術大学音楽堂 ガルニエ・
オルガンのひびき」を三月三十一日より発売
このCDには、スウェーリンク(へわが
青春はすでに過ぎ去り)、ブクステフー
デ(いかに美しき暁の星よ) BWV223
J.S.バッハ(トッカータとフーガ ドリア

調) BWV58、(いと高きところにはただ
神にのみ栄光あれ) BWV66、リスト(ハッ
ハの名による前奏曲とフーガ)、フランク
(祈り)、メシアン(神は我らのうちに)など
オルガンの重要なレパートリーを収録し、
幅広い表現力を持つ奏楽堂ガルニエ・オル
ガンの魅力に迫る。演奏は本学オルガン科
の廣江理枝准教授、録音・編集は本学音楽
環境創造科の亀川徹教授。

東京藝術大学出版会の出版物等は、藝
大アートプラザ、アマゾン(ネット販売)
および一般書店にて取り扱っておりま
す。詳しくは、藝大アートプラザ(050-
5525-2102)まで。

藝大基金寄附者(芳名)

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご
支援を賜りました皆様は、心より深謝申し
上げます。本号では、平成二十六年二月か
ら七月末日までに寄附申込んだいた皆様
を掲載させていただきます(掲載をご承諾
いただいた方のみ)。

東京藝術大学は、皆様からのご支援によ
り支えられています。末永くご支援・ご協
力を賜りますよう、よろしくお願い申し上
げます。

《個人の皆様》

鎌田 郁雄 様 百万円
常 嘉煌 様 百万円
安藤 正夫 様 三十万円
西川 こずえ 様 十万円
原田 一正 様 三万円
村山 則子 様 一万円

《法人の皆様》

酒寄電気工業株式会社様 二十万円
お問い合わせは総務課渉外事業企画室
050-5525-2400
藝大基金WEBサイト
<http://fund.geidai.ac.jp/>

◆「藝大通信」編集部では、皆様からのご意見・ご感想などお待ちしています。
今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、
こちらまでお寄せください。

〒二〇一八七一四 東京都台東区上野公園二十一八
東京藝術大学総務課内 藝大通信編集部
ファックス 03-5685-7760 E-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp